

## 《原本 千手經》と《読誦用 千手經》との対比

東国大学校教授 金 浩 星

千手千眼観世音菩薩の説かれた陀羅尼が中心となっている《千手經》(《千手千眼観世音菩薩廣大円満無礙大悲心陀羅尼經》)は、インドにおいてもインドなりの様々な儀軌などを作りながら信仰されて来たが、中国においての受容と展開はインドでの信仰とは異なる様子を見せる。インドの場合、《千手經》の信仰が密教の中に限定されて展開した一方で、中国、韓国、そして日本の場合、それは密教の中だけに限定されなかった。中国の天台宗では懺法の形態として行われ、そして禅宗で千手陀羅尼が広く読誦されたのは中国、韓国、そして日本が共有する特徴である。

しかし、韓国仏教史上に見られる《千手經》信仰の姿は、中国や日本でのそれと対比させてみる時、異なる様相がみられる。ともに禅宗において〈千手陀羅尼〉(=大悲呪)を共有する所があるが、中国や日本が大蔵經の密教部の中にある〈千手陀羅尼〉だけを抄出し、それだけを読誦していた反面、韓国の場合、そのような〈千手陀羅尼〉を抄出して読誦することでは中国や日本と同じだが、それを中心としてその前後にほかの陀羅尼と意味の理解ができる顯教的な部分等を附加・編集し、一つのあたらしい儀軌を創造していたことが異なる。そのようなところで《千手經》信仰と関連して韓国仏教に特有な姿を確認することができると思う。ここで大蔵經の密教部の中で存在する《千手經》と韓国仏教<sup>1)</sup>の中で編集されて読誦されていた儀軌としての《千手經》を区別して呼称する必要があるので、前者を《原本 千手經》と呼び、後者を《読誦用 千手經》と呼ぶことにする。この様に二つの《千手經》を考える時、次のような疑問が浮かび上がることになる。

果たして大蔵經の密教部の中に存在する《原本 千手經》にはどのような思想が現れているのだろうか。また、《原本 千手經》と韓国仏教で創造された《読誦用 千手經》との間に思想的に同一な特性が見えるのか。あるいは、どのような差異が見えるのか。そして、そのような異同の関係で確認できる意味はなんであろうか<sup>2)</sup>。

本稿はこれらの疑問に答えることをその目的にしたいと考える。これを通して、《読誦用 千手經》を産み出した韓国仏教の創造力をより明確に現わすことができると考える。このために、まず《原本 千手經》の構成とその思想を確認し、それらを考えながら《読誦用 千手經》に現れている思想を確認していく方法を取っていきたい。その後、《読誦用 千手經》をどのように見るのがいいのだろうか、その性格を規定したいと思う。

## I. 《原本 千手經》に見られる思想

### 1. 〈古本 千手經〉に見られる浄土思想

伽範達摩の訳本《千手經》(T.1060, 大正藏20)の内容を考察するためにやはり効果的なことは、科目の方法論<sup>3)</sup>に頼ることである。私は《原本 千手經》で古層の成立とその後に附加された部分があると見て、前者で〈古本 千手經〉の存在を認めることが出来ると考える。そして、その後で成立された部分を〈附加 部分〉と見ている。まず、ここでは私が想定した〈古本 千手經〉<sup>4)</sup>においての科目のみを提示したい。

表1：〈古本 千手經〉の科目

|     |                        |
|-----|------------------------|
| 序 分 | —— 六成就 (如是我聞 — 皆來集會)   |
|     | 觀音の神通 (時觀世音 — 皆*不現)    |
|     | 釈迦の解釈 (*是 — 大神通力)      |
| 正宗分 | —— 觀音の請願 (仏說是語 — 慈愛聽許) |
|     | 釈迦の許諾 (仏言 — 諸仏亦然)      |

観音の説呪（観世音 — 沙婆＊）

流通分（観世音 — 発菩提心）

一つ目は序分である。《千手經》全体を引導して行く人は釈迦である。釈迦は観世音菩薩が自分の存在を話すように機会を作っていて、観音の神通と陀羅尼についての解釈や補充を担当する役割をする。ここで、観音が見させている神通は言語を離している世界、言語を離している秘密の体験を意味している<sup>5)</sup>と私は考える。その点で、神通と陀羅尼とは同一な事件であり、同一な意味である。

二つ目は正宗分である。釈迦の許諾を得て、観音が陀羅尼を説かれている。観音の説呪は正宗分の核心のため、もっと細分したい。

表 2：観世音菩薩の説呪

|        |    |                     |
|--------|----|---------------------|
| 観音の本願  | —— | 得呪の因縁（観世音菩薩 — 超越八地） |
| 観音の本願① |    | （我時心歓喜 — 無辺世界）      |
| 観音の保任  |    | （從是以後 — 胎藏之身）       |
| 観音の本願② | —— | 十願（共有比丘 — 同法性身）     |
|        | —— | 六向（我若向刃山 — 自得大智慧）   |
| 帰依弥陀   |    | （発是願＊ — 阿弥陀如来）      |
| 懺悔     |    | （然後即当 — 生死重罪）       |
| 観音の本願③ |    | （十大願：観世音菩薩 — 勿生懈怠）  |
| 陀羅尼の提示 |    | （観世音菩薩 — 沙婆＊）       |

陀羅尼を提示する前に観音が発された願の中で本願②の十願と六向はそのまま後代の韓国仏教で《読誦用 千手經》を編集した時、陀羅尼の読誦以前に位置させていたので、それはやはり〈古本 千手經〉でのこのような編成をよく継承したと評価される。伽範達摩の訳本で八十二句の陀羅尼が提示されていたので、その意味については私は言語的・文字的な意味を問う立場ではなく、その用度意味ないし機能が何だろうかということを問う立場を取る<sup>6)</sup>。

三つ目は、私は陀羅尼が説かれて後で、“観世音菩薩、説自呪\*、大地六種変動、—— 無量衆生、発菩提心”<sup>7)</sup>という文段に注目した。この部分はよく經典の結末に見られる内容である。特に、不空訳本ではちょうど同じの文段で結末になっている。それゆえに、私はこの部分まで先に成立された〈古本 千手經〉と見ている。

それでは、この様な〈古本 千手經〉にはどのような思想が見られるのだろうか。一応、陀羅尼が説かれているから、《千手經》は密教の經典である。特に、密教の成立史的な区分によっていえば、それは初期密教の經典ということが出来た。だが、他の初期密教との差異点は、現世利益のために陀羅尼が説かれているのではないということである。陀羅尼の読誦を通して三昧と弁才を得て、罪業を懺悔することによって仏国へ往生することが出来ると言う来世への信仰も存在するからである。しかしながら、《千手經》を雜密の經典だと評価してはならないと私は考える。すでに、拇尾祥雲も智通訳本の《千手經》に対してこの様な差別性を認められる上で“これ明らかに願意の向上と密法内容の進歩とを示すものである。”<sup>8)</sup>といわれている。

私は〈古本 千手經〉には密教の思想は勿論であり、その以外にも《無量壽經》の淨土思想の影響が認められていると思う。まず、十大願の部分<sup>9)</sup>を分析すれば、《無量壽經》のように定型化されていないが、その中に“我誓不成正覺”という句節のある願が四つ<sup>10)</sup>である。これらは“設我得仏 — 不取正覺”の構造を持つ《無量壽經》の四十八願を考えさせるのに充分である。それ故に、十大願の全体でその意味が内在されていたと見て、それらを四十八願と対比させていきたい。これらの叙事構造の比較を表であらわしてみよう。

表3：《無量壽經》と《千手經》との叙事構造

| 本生時の名前 | 本師      | 本願   | 成就    | 法門  |
|--------|---------|------|-------|-----|
| 法蔵比丘   | 世自在王如来  | 四十八願 | 阿弥陀仏  | 念仏  |
|        | 千光王静住如来 | 十願六向 | 観世音菩薩 | 陀羅尼 |
|        | 阿弥陀仏    | 十大願  |       |     |

まず、〈古本 千手經〉でも表2に見るようにその帰依弥陀の部分で“本師阿弥陀仏”という表現が登場する。観音の本師としての阿弥陀仏であるから、浄土思想の影響が認められる。もう一つは、十大願と四十八願を対比させていけば、十大願の中の①臨終往生願と②生諸佛国願（この願の名前は私が命名した。）は第十八の念仏往生願の中で部分的に包含されていたと考える。なぜなら、三心の存在は説かれていないので、十大願と四十八願は共に往生仏国を述べているのである。

表4：《無量壽經》と《千手經》との往生比較

|      | 目的 | 目的地   | 方法  | 除外       | 三心 |
|------|----|-------|-----|----------|----|
| 無量壽經 | 往生 | 阿弥陀仏国 | 陀羅尼 | 陀羅尼への疑心  | ×  |
| 千手經  | 往生 | 阿弥陀仏国 | 十念  | 五逆罪、誹謗正法 | ○  |

ただ、その仏国が阿弥陀仏の国土であることが《千手經》では明記されていないらず、次の文章で“亦応専念我本師阿弥陀如来”<sup>11)</sup>ということから、その“仏国”が文脈の上で阿弥陀仏国であることが明確になると思う。

もう一つ注目したいのは、華嚴の十地思想があらわれることである。陀羅尼を得て観音は初地から八地へ超越したといわれており、流通分でも陀羅尼を聞いた大衆達が十地を得た<sup>12)</sup>といわれている。このように、《千手經》の中で十地思想があらわれているのは《千手經》を菩薩行の観点から見させているからである。これはまた《無量壽經》の立場とも相通ずるのである。観音の行願は法蔵比丘の“莊嚴佛土清浄之行”<sup>13)</sup>に異なるものではないからである。このような現世的な菩薩行としての観音行の理解を通して“浄土 — 千手 — 華嚴”の思想が一つに会通／帰一すると見ることも出来る。この特性は《読誦用 千手經》でもそのままあらわれる。

## 2. 〈附加 部分〉に見られる禅的な次元

〈附加 部分〉は基本的に〈古本 千手經〉に対する解釈／補充の意味があると見る。補充された部分は集中的に読誦の方法、読誦の功德、そして読誦者

に対する擁護等であった。それでは、〈古本 千手経〉を解釈する〈附加 部分〉で見られる思想的な立場はどうなるのか。

まず、〈古本 千手経〉に見られる浄土思想は〈附加 部分〉でも確認できる。観音の名号を説かれている部分で“専称名号、得無量福、滅無量罪、命終、往生阿弥陀仏国。”<sup>14)</sup>という部分がある。しかし、このような浄土思想より大きく注目したいのは、禪的な次元があることである。これを確認するために〈附加

部分〉の科目を設定する必要がある。〈附可 部分〉には観音と釈迦の解釈／補充の二つの部分に再び分類されるので、ここでは我々の論述のために必要な観音の解釈／補充の科目のみを提示した。

表5：観音の解釈／補充の科目

大梵天王との問答 —— 大梵天王の請問

観音の応答（＝九心）

大梵天王の決意

無問自説 —— 読誦の方法

日光、月光菩薩達の擁護

読誦者の功德と擁護 —— 功德

—— 擁護

消除災禍清涼之＊

陀羅尼とその読誦の功德

十二蔵

結界

この中で禪的な次元が見られるのは、九心と十二蔵である。

一つ目は九心である。大梵天王が観世音菩薩に“陀羅尼の形模状相”<sup>15)</sup>に対して質問する。この“形模状相”の意味はなんだろうか。野口善敬は“陀羅尼〔の内容が現れる心の〕姿形”<sup>16)</sup>と理解している。私も“形模状相”が心と関連していたと言う点で共感する。しかし、陀羅尼の形模状相が言語的／文字的な解釈を通してあらわれる意味では発見することができないと見ていた。だか

ら、相はかえって相ではなく、性の次元を問いている。陀羅尼の本質は何であろうかという質問について、〈附加 部分〉は、その陀羅尼はただ名前／文字／言語ばかりであり、実際にはその本質は心で探していかなければならないという。この心を《原本 千手經》では九心とっており、私は、この九心を《起信論》の三心によって分類することもできると思う。表であらわしてみよう。

表6：三心による九心の分類

| 《起信論》《観無量壽經》 |       | 《原本 千手經》                              |
|--------------|-------|---------------------------------------|
| 直心           | 至誠心   | 平等心、無為心、無染着心、空観心、<br>無上菩提心、無雜乱心、無見取心。 |
| 深心           | 深心    | 恭敬心、卑下心。                              |
| 大悲心          | 回向発願心 | 大慈悲心                                  |

その中で直心に当たっている心などが禅の次元をあらわしていると思う。直心が禅の基盤だからである。この様に見る時、陀羅尼は九心を得るための方便であると言う意味を持つことになる。

二つ目は、十二蔵に対してである。これは陀羅尼の読誦者に対する定義である。“誦持此陀羅尼者、当知其人、即是佛身蔵”ということを始め十二蔵の存在<sup>17)</sup>が説かれていた。陀羅尼の読誦者が即ち佛身蔵でありないし禅定蔵であるという時の“蔵”の意味は如来蔵思想の立場ではない。経文で“即是”と言いかから如来蔵の潜在態ではなく仏性が起っている現実態である。陀羅尼を読誦すれば、その時、衆生は佛であるという観点は華嚴の性起思想が現れているのである。また、それに基づいている禅的な次元であると私は考える。

## II. 《読誦用 千手經》の思想

韓国仏教の歴史で《原本 千手經》を最初に受容した人物は新羅の義相(625～702)であった。彼の著述の《投師礼》で《原本 千手經》からの引用が現れているのが、《原本 千手經》について最古の文献である。以来、14世紀の華嚴思想家の体元によって宣揚されるなど、朝鮮時代以前には主に華嚴の

立場で受容されており、朝鮮時代に至っては再び禪の立場で継続的に編成されていた<sup>18)</sup>。このような《読誦用 千手經》の成立過程においてすでに韓国仏教の主な特性の一つと言われる会通仏教な性格、即ち密教、華嚴、そして禪の組み合わせが見られる。

それでは、先に検討した《原本 千手經》の思想が、果たして《読誦用 千手經》の中でどのように反映されたのかを考察しようと思う。そのためにまず、《読誦用 千手經》<sup>19)</sup>がどのように構成されていたのを見たい。やはり、科目の方法論によって、私は次のように十門に分類する。これを千手十門という。

表6：《読誦用 千手經》の十門

- ①開經：〈浄口業真言〉～〈開法蔵真言〉
- ②啓請：千手千眼觀自在菩薩 ～ 所願從心\*円満
- ③別願：南無大悲觀世音 ～ 自得大智慧
- ④別帰依／召請：南無觀世音菩薩摩\* ～ 南無本師阿弥陀仏
- ⑤陀羅尼：〈神妙章句大陀羅尼〉
- ⑥讃歎：〈四方讃〉と〈道場讃〉
- ⑦懺悔：〈懺悔\*〉～〈懺悔真言〉
- ⑧准提呪：准提功德\* ～ 願共衆生成仏道
- ⑨総願：〈如来十大発願文〉と〈四弘誓願〉
- ⑩総帰依：南無常住十方仏 ～ 南無常住十方僧

このように見れば、《読誦用 千手經》には祈祷（啓請）、発願、帰依、誦呪、讃歎、懺悔などの六つの修行をあまねく含んでいた。しかし、この千手十門の科目は《読誦用 千手經》の各部分が持っている意味は理解できるが、果たして《読誦用 千手經》が究極的に何を述べようとしている經典／儀礼であるのかが少し理解にくい。それ故に、私は千手十門を基づいて《読誦用 千手經》を次のように序分、正宗分、そして流通分の三分に再び分類したい。（円文字は千手十門のである。）



表 7：《読誦用 千手經》の三分

|     |    |                      |
|-----|----|----------------------|
| 序 分 | —— | 開經 (①)               |
| 正宗分 | —— | 大悲呪 (②～⑦)<br>准提呪 (⑧) |
| 流通分 | —— | 総願 (⑨)<br>総帰依 (⑩)    |

この三分を通して《読誦用 千手經》が大悲呪と准提呪という陀羅尼の読誦が中心になっていたことが分かる。この中で、⑧准提呪は《原本 千手經》には説かれていない。それは朝鮮時代の中葉に至って\*の法\*の《顯密円通成仏心要集》の影響があり、准提呪の部分を追加・編集されたと考えられる。

それでは、これらの《読誦用 千手經》で《原本 千手經》の思想がどのようにあらわれていたのだろうか。私は《原本 千手經》で〈古本 千手經〉の存在を抽出・想定し、そこに浄土思想が現れていたと見た。その特性は《読誦用 千手經》でもそのまま反映されていた。ただ、〈古本 千手經〉の帰依弥陀では観音と阿弥陀佛に対してのみ帰依が説かれていたので、《読誦用 千手經》の④別帰依／召請では極樂三尊として色んな変化観音を説いていたという差異がある。のみならず、⑨総願の“如来十大発願文”では“願我決定生安養、願我速見阿弥陀”と念願していた。

次に、《原本 千手經》の附加部分の禪的な次元はやはり《読誦用 千手經》で確認できるのであろうか。《読誦用 千手經》は〈古本 千手經〉の思想を受け取って大悲呪を読誦しようということでそのための儀礼として編集しており、〈附加 部分〉での色々な教説をその中で取り込んでいないが、《読誦用 千手經》の場合でも禪的な次元が見られる。それは⑦懺悔と⑨総願の中で、発四弘誓願では“衆生無辺誓願度、——”と共に“自生衆生誓願度 ——”とを説かれている。前者の次元を事の四弘誓願といい、後者のそれを理の四弘誓願という。この中で禪的な次元は理の四弘誓願で確認できる。懺悔の場合でも、罪が心の外に実在していたと見て“一切我今皆懺悔”という懺悔を事懺と言い、罪は心の外で実在していないという認識の上で“罪亡心滅両\*空、是即名為真

懺悔”という理懺で禅の次元がある。四弘誓願で衆生もやはり心の外でのそれではなく、自性の衆生であると言う部分で禅的な次元があるのである。特に、自性の衆生を済度しようと、いわゆる理の四弘誓願をあらわす頌は中国の禅宗の六祖慧能（638～713）の《壇經》からの引用である。

このように、《読誦用 千手經》は《原本 千手經》に現れている。浄土思想と禅的な次元をよく継承していた。ただ、その密教思想の中で大悲呪のみならず、准提呪を共に読誦させている点で多少の変化が見えるので、それは朝鮮時代の仏教のコンテキストが反映された結果と見える。

### III. 《読誦用 千手經》の性格論

韓国仏教で編集されて読誦されていた《読誦用 千手經》をどのように評価できるのか。いわゆる、性格論である。この問題について韓泰植（普光）は“偽經である”<sup>20)</sup>と見た。勿論、《読誦用 千手經》そのままインドで撰述されていたのではないから、“偽經である”と見ることもできると思う。しかし、《読誦用 千手經》の場合は、他の偽經とは異なる特徴があるという事実に着意したい。それは《読誦用 千手經》の場合、大藏經の中で《原本 千手經》と呼ばれる母体が存在するのである。その点で、私は《読誦用 千手經》を儀軌として規定したい。《読誦用 千手經》は《原本 千手經》の陀羅尼の読誦をより易くするために編集された作法次第ないし軌則儀式<sup>21)</sup>からである。

儀軌として《読誦用 千手經》を見る時、《千手經》は構造的に儀軌の性格が強いので“一般的な読誦用ではなくで、専門家達によって執行される儀式で活用される側面が強い”という許一範の観点<sup>22)</sup>は再考する必要があると私は考える。勿論、密教の儀軌は専門家のみによって行うことができるかもしれないが、《読誦用 千手經》は実際に韓国仏教の信者達が僧侶と一緒に仏供など色々な儀式で読誦するからである。よって、私が言う《読誦用 千手經》が儀軌だと言う性格論では、読誦という口密の一密それ自体も儀軌になるという立場が介在している。それは初期密教の特性をそのまま反映しながら、それを修行法の一つに昇化させている韓国仏教の信仰上一つの特性であると私は考える。

《読誦用 千手經》が偽經なのか、或いは儀軌なのかと言う問題より重要なのは、それに韓国仏教の歴史というコンテキスト／特殊性が反映されていると言う点である。その構成では密教<sup>23)</sup>、浄土、華嚴、懺悔に見られる戒律、そして禅などが共に説かれていることが分かって来た。そこに、《読誦用 千手經》で会通仏教<sup>24)</sup>という韓国仏教の特殊性がよく現れていた。その点から見れば、《読誦用 千手經》を通して中国や日本とも異なる韓国仏教の創造性ないし特殊性を確認することができる。

ただ、《千手經》の信行においては韓国仏教と日本仏教との立場の差異に対しては今後の課題にしたい。

註

- 1) 本稿で“韓国仏教”という言葉は仏教の公伝(372)以来現在にかけて韓半島の仏教の歴史を通称する。しばしば日本では、それを“朝鮮仏教”という用語で呼ぶ場合もあるが、“朝鮮”は特定の時代として韓国仏教の全体の歴史を代弁する用語はできない。また、地理的に見て“朝鮮半島の佛教”の意味で“朝鮮仏教”という用語を使うことはできないではないが、仏教史の観点から見る時、“朝鮮半島”(この用語も韓国では“韓半島”といわれているが)の佛教は現在韓国において伝承されているから“韓国佛教”ということがよりよろしいのではないかなと思う。
- 2) この疑問は事実、佛敎大学の田中典彦先生からのご質問であつた。先生のご質問に対して答へがこの論文である。ここで、先生のご指導にお礼を申し上げたい。勿論、本稿の内容に対してすべての責任は私にある。
- 3) テキストのある部分の意味を全体と関連しながらはあくすることで、それを図式として現れることが出来る。だから、科目は全体の中で部分を見て、部分の中で全体を見ることができる方法論である。この科目のみを別に整理した本も存在する。例えば、普寂、《華嚴經探玄記發揮分科》、大日本佛敎全書、第8冊(東京：名著普及会、昭和61年)、p.381～415。参照。科目の方法論が持つ解釈学的な意義については拙稿、〈伝統的な佛敎学の方法論に現れている現代的な性格—解釈学的な装置を中心に—〉、《伽山学報》第7号(ソウル：伽山学会、1998)、p.61～68。参照。
- 4) 大正蔵 20、106a～108a 3行。
- 5) 《維摩經》の不思議品に見られる神通にたいしてこの様に見たことがある。拙著、《大乘經典と禪》(ソウル：民族社、2002)、p.112。参照。
- 6) 陀羅尼が持つ用度意味乃至機能については拙稿、〈密敎の陀羅尼の機能に対する考察〉、《印度哲学》第6輯(ソウル：印度哲学会、1996)、p.175～200。参照。
- 7) 大正蔵 20、107c-108a。

- 8) 拇尾祥雲、《秘密佛教史》(東京：隆文館、昭和56年)、p.59.
- 9) 大正蔵 20、107a～b.
- 10) ②不墮惡趣願、③生諸佛國願、④得定弁才願、そして⑥転女成男願等である。
- 11) 大正蔵 20、107a.
- 12) 大正蔵 20、106c.; 108a.
- 13) 大正蔵 20、267c.
- 14) 大正蔵 20、110a.
- 15) 大正蔵 20、108a.
- 16) 野口善敬、《ナムカラタンノーの世界―千手経と大悲呪の研究―》(京都：禅文化研究所、2000)、p.94.
- 17) 大正蔵 20、109.
- 18) より詳しい情報は拙稿、〈千手経の信行の歴史的な展開〉、《未来佛教の向方》(ソウル：蔵経閣、1997)、参照。
- 19) 《読誦用 千手経》は現在、韓国仏教の殆どの宗派(密教の宗派は読まない)で読誦される。朝の礼仏の前に道場釈の時、仏供、死者のための儀礼等で広く読誦されており、その全文を見ることは難しくない。寺院で使っている各種の法要集に殆ど収録されていた。
- 20) 韓泰山(普光)、〈韓半島で作られた疑偽経について〉、《印佛研》45～1(平成8年12月)、p.314.
- 21) これらの儀軌の定義については《密教大辞典》1巻(京都：法蔵館、昭和44年)、p.264.
- 22) 許一範、〈韓国の真言・陀羅尼の信仰研究〉、《悔堂学報》第6号(ソウル：悔堂学報、2001)、p.56.
- 23) 密教の陀羅尼の中でも主な大悲呪、准提呪、そして六字呪が全部集まっていた。
- 24) 会通仏教は何であろうか。一つは、多様な教説がその根本において異なるのではないということである。愚劣より相通を追求する。もう一つは、多様な修行法があるが、それらの兼修を主張する。なぜなら、専修は選択の行為であり、そこには他の修行法は排除される。しかし、会通仏教の立場では排除される他の修行法が必ず排除されなければならないことは考えられない。すべての修行法が衆生の済度に助けてくれるからである。勿論、韓国佛教でも宗派や宗派的な思考は存在しなくてはならないので、あくまでもその主流は会通仏教であり、私の仏教観はそれらの会通仏教の観点を継承・志向しようとするものである。